

東海道川崎宿の見どころ



芭蕉の句碑

「麦の穂を たよりにつかむ 別れかな」1694(元禄7)年5月、故郷伊賀に向かった芭翁が、見送りにきた門人たちと川崎宿のはずれの茶店で別れを惜しみ詠んだ句です。江戸時代の川崎宿を偲ばせる遺産の一つです。



小土呂橋と解説板

問屋場と解説板

東海道が二ヶ領用水の下流にある新川堀という水路を横断するところにかかるいた橋で、1729(享保14)年に、ベトナムからきたゾウがこの橋を渡って江戸に行きました。現在は、交差点脇に橋の欄干の親柱が保存され、解説板が建てられています。また、稻毛神社に石橋が保存されています。



一行寺

別名闇魔寺といわれ、闇魔様の座像があります。境内には川崎最初の寺子屋を開いた浅井忠良の墓と、富士講の西川満翁の墓があります。



無縁塚

江戸時代、灾害や飢餓などで亡くなった身元不明の遺体を埋葬したのではないかといわれています。これら無縁仏の供養のため「供養塔」が建てられました。



教安寺

境内には、江戸中期に庶民から生き仏様と敬われた徳上人の六字名号碑がありますが、これらは川崎宿の人々によって建てられたものです。その他、江戸時代に鋳造された梵鐘で、市内に今でも残っている三つの中の一つがあります。山門前左側に建っている石灯籠は富士講の信者が建てたものです。



高札場

高札場は、幕府や領主の法令や禁令などを木の札に書き記した「高札」を立てる場所です。多くの目に触れるような場所に設置されました。川崎宿では、問屋場の向かいに設置されています。



宗三寺

鎌倉時代創建、勝福寺が前身といわれています。境内には川崎宿の遊女の供養塔と、波多野家と青木家の墓石の頭部中央に「烏八臼」と刻まれた、いまだ解明されていない墓石があります。



田中本陣と解説板

新田屋

本陣は主に大名、公家、旗本などが宿泊する施設で、門構え、玄関付、延231坪の堂々たる建物でした。本陣の主人である田中休愚は、本陣、名主、問屋役の三役を兼務し、六郷の渡し船の権利を江戸側より川崎宿に譲り受け、宿場の財政を立て直しました。そして「民間省要」を著し、二ヶ領用水や酒匂川の治水に活躍し、幕府の支配勘定格(大名並み)に登用されました。現在は、手前の道路沿いに解説板が建てられています。



見附(江戸口)

宿場の入口には、石を積んでつくった土居がありました。渡船場側の入口が江戸口で、ここから川崎宿がはじまります。



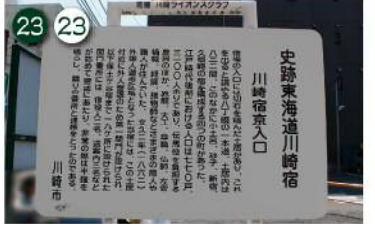
六郷の渡しと碑

1600(慶長5)年、多摩川に六郷大橋がかけられましたが、1688(貞享5)年の大洪水で流され以来、1874(明治7)年まで、渡しが続けられました。1868(明治元)年の明治天皇行幸の際には船橋をかけ渡りました。現在は、碑と解説板が建てられています。



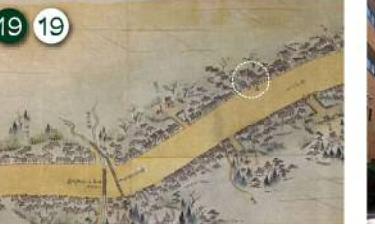
妙遠寺

境内には、川崎宿本陣・名主・問屋役三役を兼務し、後に幕府の要職にまで立身出世するなど、川崎中興の祖といわれた田中休愚と二ヶ領用水を完成させた小泉次大夫の偉業を讃える「泉田二君功德碑」・日純上人の供養塔・小泉次大夫夫婦の逆修塔・石川駿河守吉久夫婦の墓があります。



見附(京口)

宿場の京都側の出入口にあたる所が京口でした。そこには切石を積んだ土居があり、現在、馬鹿病院のあるところが京口で、ここから川崎宿上る際に宿泊しました。1890(明治23)年詩人佐藤惣之助がこの家で生まれ、人正から戦前にかけて活躍し、「六甲おろし(大阪タイガースの歌)」「青い背広で」「人生劇場」など、今でも多くの人に親しまれている歌の作詞をしました。現在は、佐藤惣之助に関する碑と解説板が道路に向いて建てられています。



佐藤本陣と解説板

別名、惣左衛門本陣といわれ、門構え、玄関付、181坪の建物でした。幕末には14代将軍徳川家茂が京に上る際に宿泊しました。1890(明治23)年詩人佐藤惣之助がこの家で生まれ、人正から戦前にかけて活躍し、「六甲おろし(大阪タイガースの歌)」「青い背広で」「人生劇場」など、今でも多くの人に親しまれている歌の作詞をしました。現在は、佐藤惣之助に関する碑と解説板が道路に向いて建てられています。



川崎・砂子の里資料館

東海道川崎宿をテーマにした私設資料館です。数多くの江戸文物・浮世絵を中心に各種美術文化を展示紹介しています。海鼠壁風の江戸町屋の外観は、川崎宿の当時の街並みを連想させます。



稻毛神社

平安時代以降、山王社と呼ばれており、江戸時代には川崎宿及び河崎七ヶ村の鎮守として、広く近隣一円の崇敬を集めました。明治時代に稻毛神社となりました。今も宮座式などの伝統神事が受け継がれており、境内や隣接する稻毛公園には、小土呂橋の遺構や旧六郷橋の親柱など歴史的な遺産も多くあります。



川崎稲荷社

社殿・鳥居は1951(昭和26)年頃再建され、基礎の土留に二ヶ領用水にかかっていた石橋の部材を使用し、また社殿の下に、いわゆるあるケヤキの大木の根株が眠っています。1716(享保元)年紀州藩主徳川吉宗が8代将軍になるために江戸へ向かう途中、この境内で休息したという言い伝えが残っています。



渡船高札場

船着場の近くに設置され、渡船料が書かれていました。川崎市市民ミュージアムには、この渡船料について書かれた高札が展示されています。



大徳寺

境内には、「江戸名所図会」にも描かれた川崎宿の茶屋「万年屋」の主人半七の墓、徳上人の篤い信者で、念佛を唱えながら安らかに17歳で往生したと伝えられる塩浜の名主、佐々木久左衛門の息子常太郎の墓があります。



中の本陣と解説板

問屋場に向かい合う形で建っていた通称「中の本陣」は、正式には惣兵衛本陣といい、佐藤・田中本陣の間に位置することから中の本陣と呼ばれていましたが、江戸後期に廃業しました。現在は、解説板が建てられています。



助郷会所と解説板

東海道は各宿場に100人100疋の伝馬人足を置く事が決められていましたが、伝馬人足数が不足する場合に、周辺村落より人馬を徴収する助郷という制度ができました。助郷会所は、助郷に指定された村の代表者がつめ、助郷人馬の手配等を行った事務所です。現在は、解説板が建てられています。



真福寺

川崎宿に3つしかない参道を持つ寺の1つで、本尊の薬師如来は、古くから眼の病気や多くの病気に効能があると信じられています。境内には、市の重要郷土資料に指定されている1665(寛文5)年銘の庚申塔があり、市内最古級、最大です。庚申塔の前にある石製香炉は国内でも古いものといわれています。



川会所

多摩川を渡る渡船料金の徵収や船の発着を指示していたところです。昼夜を問わず、幕府公用の飛脚や旅行者の対応にあたっていました。川留め(増水等の理由により渡船を停止すること)の決定なども、この川会所で行っていました。

川崎宿解説 まち歩き用シート

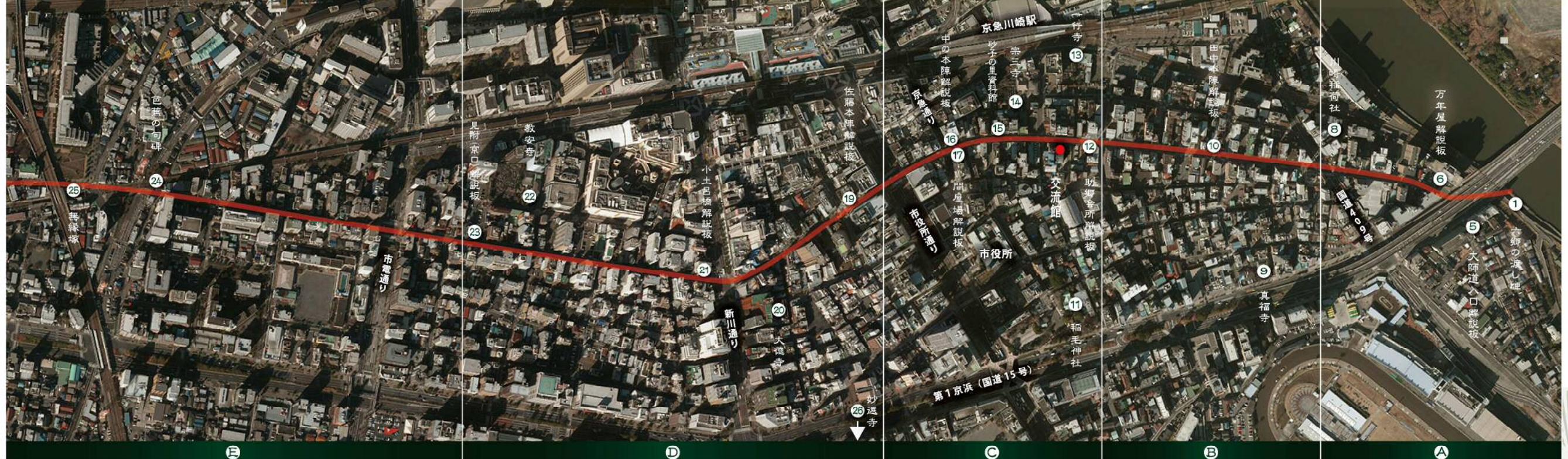
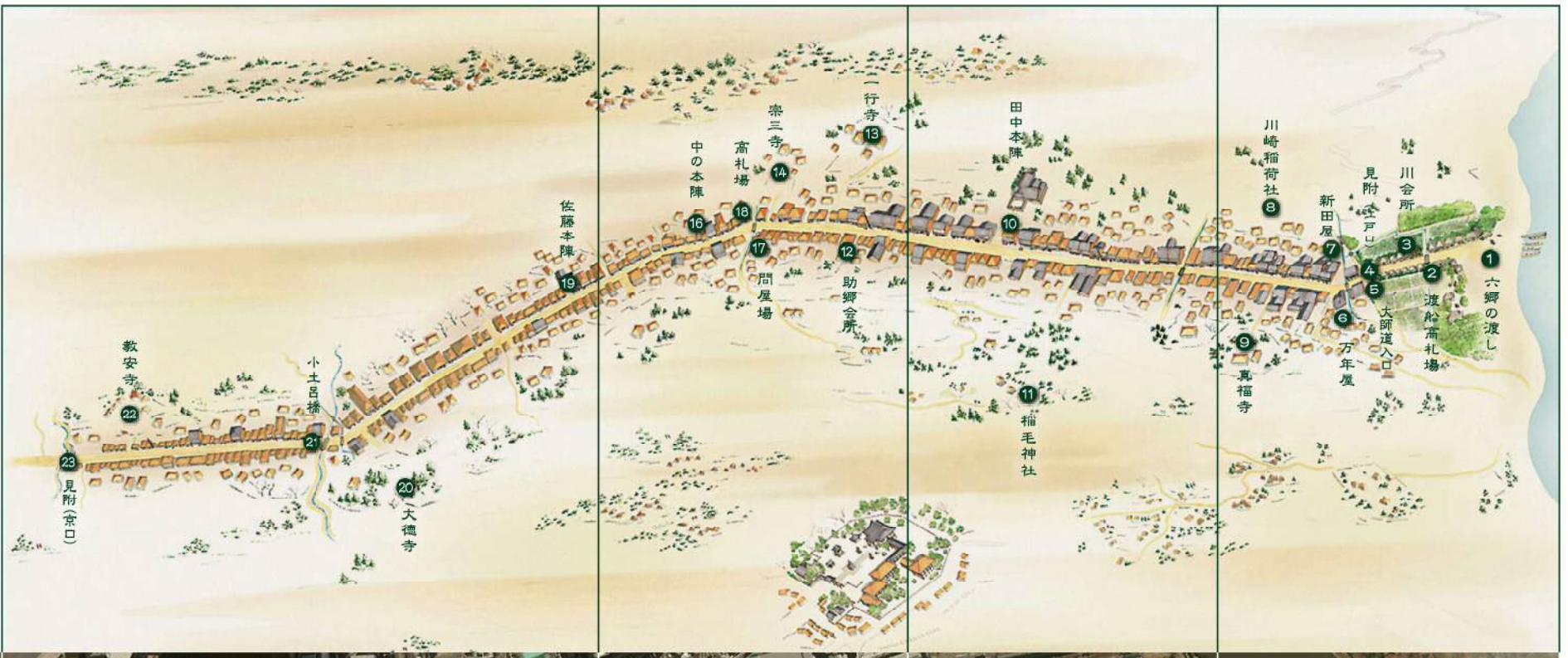
江戸時代の東海道川崎宿の面影は、現在はあまり残っていませんが、昔の地図と比較してみると、道の形や家の区割りなど、当時の様子を伝えるものが見つかります。特にお寺や神社は、江戸時代の地図にも描かれており、当時の姿が伺えます。

かつての場所が現在のどこにあたるのか、川崎宿の面影を残す場所は現在どこにあるのかなど、江戸時代の川崎宿の街並みを想定し描いたイラストと現代の航空写真を見比べ、楽しいまち歩きへつなげてください。

現代の川崎宿



江戸時代の 川崎宿



E区間 市電通り手前～ハ丁暁駅
川崎宿を出て神奈川宿に向かう途中の地区です。かつての川崎宿からは外れたエリアですが、現在は、芭蕉の句碑や川崎宿の外れに埋葬されたとされる遺体の供養のために建てられた供養塔などがあります。

D区間 市役所通り～市電通り手前(当時の京口)
川崎宿のうち、一番京都側に位置し佐藤本陣があった地区です。京都側の出入口にあたる京口があった場所や本陣のあった場所には解説板が建っています。また、江戸時代には、この地区中央付近で二ヶ領用水の主流である新川と交差しており、交差部に小土呂橋がありました。新川のあった位置は、現在の新川通りとなっています。

C区間 助郷会所解説板手前～市役所通り
かつての東海道は、宗三寺のあたりから大きくカーブしており、このエリアに問屋場、高札場、助郷会所などの行政的な施設がありました。現在も、近隣に川崎市役所があります。カーブした道路の形は、現在も残っており、かつて中の本陣があった場所の付近で、現在の京急通りと交差しています。この交差点には現在、中の本陣と問屋場の解説板がありますが、江戸時代の問屋場は、実際は宗三寺の方向にずれた位置にありました。

B区間 国道409号～助郷会所解説板手前
川崎宿をかつて田中本陣があり、商家や旅籠などもあってぎわった地区です。現在は本陣があった場所に解説板が建っています。

A区間 多摩川～国道409号
多摩川からすぐの地区で、かつて六郷の渡しがあった場所に、現在は碑があります。その先の大師道の入口と万年屋があった場所には、現在、国道15号線の陸橋が架かり、大師道の入口の解説板は陸橋の東側、万年屋の解説板は陸橋の西側（東海道沿いの反対側のずれた位置）に建っています。

*川崎市の空中写真を使用しています。